

大学院生によるアメリカの小中学校での 体験型海外教育実地研究報告IX

深澤清治・小原友行・朝倉 淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三
神野幸隆*・河原洸亮*・斉藤弘樹*・竹内和也*・谷 沙織*・坪根沙織*
中川琢磨*・原田 啓*・福岡晃子*・守谷富士彦*・山田 薫*・吉田梨声*
(2015年12月7日受理)

A Report on Overseas Teaching Practicum by Graduate Students in Elementary/Secondary Schools in the United States (IX)

Seiji FUKAZAWA, Tomoyuki KOBARA, Atsushi ASAKURA, Taketo MATSUURA, Nagako MATSUMIYA,
Atsumi UEDA, Yukitaka KAMINO, Kosuke KAWAHARA, Hiroki SAITO, Kazuya TAKEUCHI,
Saori TANI, Saori TSUBONE, Takuma NAKAGAWA, Hiromu HARADA,
Akiko FUKUOKA, Fujihiko MORIYA, Kaoru YAMADA and Rina YOSHIDA

Abstract. This short paper reports on the 9th overseas teaching practicum in the United States by 12 graduate students of Hiroshima University, Japan, partly organized by Hiroshima University Global Partnership School Center (GPSC). The grand total has become 89 since this project started in 2006. The participants this year were those majoring in elementary/secondary school education, including one in-service teacher. They observed and conducted lessons in English in four local public schools in North Carolina. The aim of this project was threefold: 1) to self-develop practical instructional competence by teaching pupils with different cultural backgrounds; 2) to enhance the abilities in developing teaching materials through hands-on teaching experiences in English; and 3) to acquire the abilities to design, implement and evaluate programs for promoting global partnership. Like past years, their teachings were very positively covered by the local newspapers and websites. Later, the project was followed by cross-cultural field study visits to NC State Capitol, Raleigh and the U.S. Capitol, Washington, D.C. It is hoped that this intensive experience overseas will broaden the young future Japanese teachers' global awareness and confidence in teaching.

1 はじめに

「体験型海外教育実地研究」は、広島大学グローバル・パートナーシップ・スクール・プロジェクト研究センター（略称は GPSC）が開発し企画・実施しているプログラム（2009年度からは教職高度化プログラムの選択科目）であるが、本年度は第9回目の実施となる。本年度は、博士課程前期1年の大学院生10名【初等6名，中等4名（内，現職社会人院生1名）】，博士課程前期2年の大学院生2名【初等2名】の合計12名が参加して実施された。なお，全9回のこれまでの参加者を通算すると，89名となる。

この授業は前期の集中科目の位置づけではあるが，実際は年間を通したプログラムとなっている。

具体的に本年度は，4～8月の事前の教材研究，9月18日～28日の米国での教育実地研究（ノースカロライナ州グリーンビル市内の公立のウォールコーツ小学校・エルムファースト小学校・C.M. エッペス中学校での授業観察および教育実習とイーストカロライナ大学での授業参加と受講学生との交流，州都ローリー市内のイクスプローリス小学校および同中学校での授業見学と校長・教員との意見交流，そして博物館を中心とした教材調査，首都ワシントン DCでの多文化理解学習のための教材調査），そして帰国後の10～11月の事後研究による教材の完成とレポート作成，12月10日の成果発表会となっている。

また，本年度も，7月11日に開催された「新

*広島大学大学院教育学研究科博士課程前期大学院生

しいグローバル時代の教育～学校におけるグローバル対応の試み～」をテーマとした第11回の学校間交流国際フォーラムのために来日してもらった、実習校であるエッペス中学校のアリソン・キリー先生とイクスプローリス中学校のメレディス・チータム先生の協力を得て、7月12日に行われた授業研究ワークショップにおいて、事前の指導案検討を綿密に行った。

なお、本年度の取り組みについては、グリーンビル市の新聞社とテレビ局の取材および報道もあり、現地でも注目された。また、日本でも地元のテレビ・新聞の取材がなされた。以下では、本年度の教育実地研究の概要、参加者の報告、評価について紹介していきたい。

2 2015年度「体験型海外教育実地研究」の概要

(1) 全体日程

2015年度、本授業科目の実施状況（全体日程）は以下のとおりであった。

- 4月7日(火) 本授業の概要と計画説明
- 4月23日(木) 授業研究テーマ事例の考察および渡航のための諸手続きの確認
- 5月21日(木) 授業研究テーマ案の交流・設定
- 6月4日(木) 学習指導案の検討(1)
- 6月11日(木) 学習指導案の検討(2)
- 6月24日(水) 学習指導案(英語版)の検討(1)
- 6月25日(木) 学習指導案(英語版)の検討(2)
- 7月11日(土) 第11回学校間交流国際フォーラム参加
- 7月12日(日) 2015年度「体験型海外教育実地研究」授業研究ワークショップ参加
- 7月28日(火) 学習指導案・教材・教具の検討および渡航のための諸手続き
- 8月31日(月) 準備状況の確認、教材集・報告書の作成・報告会についての確認、渡航に関する書類提出
- 9月14日(月) 渡航前最終打合せ
- 9月18日(金)～9月28日(月)
米国における「体験型海外教育実地研究」
- 12月15日(火) 「体験型海外教育実地研究」研究成果報告会

(2) 現地での日程

- 9月18日(金) 広島出発、成田泊

- 9月19日(土) 成田出発、米国ノースカロライナ州グリーンビル到着
- 9月20日(日) 授業準備および授業打合せ
- 9月21日(月) グリーンビル現地学校訪問(観察)、イーストカロライナ大学教材開発センター見学、同大学学生との交流
- 9月22日(火) グリーンビル現地学校訪問(授業実施)
- 9月23日(水) イーストカロライナ大学の授業参加、ローリーへ移動
- 9月24日(木) イクスプローリス中学校・小学校見学
- 9月25日(金) ローリー市内(博物館等)研修、ワシントンへ移動
- 9月26日(土) ワシントン(スミソニアン博物館等)研修
- 9月27日(日) ワシントン出発、機内泊
- 9月28日(月) 広島到着

(3) 参加者およびグリーンビルにおける配置

本年度の「体験型海外教育実地研究」には、前述のとおり大学院生12名が参加した。なお、参加大学院生の渡航費用や滞在費は全て自己負担となっている。

参加学生の現地での学校配置、担当者、参加者、引率教員は以下のとおりである。参加者は事前に準備した授業を各校において実施した。

【エルムハースト小学校(K-5)】

実施校担当者：ワンダ・ウィリアムズ先生

参加者：坪根沙織・中川琢磨・守谷富士彦・吉田梨声

引率者：植田敦三・松宮奈賀子

【ウォールコート小学校(K-5)】

実施校担当者：クレア・エリザベス・マックスウェル先生

参加者：神野幸隆・谷沙織・原田啓・福岡晃子

引率者：深澤清治・松浦武人

【C.M.エッペス中学校(6-8)】

実施校担当者：アリソン・キリー先生

参加者：河原洗亮・斉藤弘樹・竹内和也・山田薫

引率者：小原友行

3 参加者の報告

参加者(12名)は、各校において実践した授業に関する「ねらい」、「概要」、「成果と課題」および授業の準備から実践を通じた「自己変容」について報告を作成した。次頁以降にこの報告を掲載する。

kindergarten 異文化理解 “Let’s enjoy Children’s Day!”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 坪根 沙織

1 ねらい

日本の伝統行事である「子どもの日」について理解すること。また、折り紙で「兜」を作ることを楽しむこと。

2 概要

- (1) 子どもの日について電子黒板を使って説明をする。子どもの日のイメージを掴んでもらうために、母の日と似ている一面があることや、前立てには、夢や願いが込められている兜があることを紹介する。
- (2) 折り紙兜を折る。子どもには15センチ角の折り紙で途中まで折ったものを配る。授業者は60センチ角の折り紙用いて、折り方の説明をしながら、1ステップずつ一緒に折る。
- (3) 自分の夢や願いを紙に描いて、兜に貼る。
- (4) 作った兜を被って、どんな夢や願いを描いたかを発表し、作品を見せ合う（図1）。
- (5) 子どもの日について振り返る。



図1 兜を見せながら自分の夢を話す様子

3 成果と課題

得られた成果は、事前準備を十分にしたため、臨機応変に対応することができたことである。そのため、夢や願いを描き、発表するというメインの活動の時間を十分とることができ、子どもたちは活動を楽しみながら「子どもの日」について理解することができた。

課題は、2点ある。

1点目は、もっとわかりやすい説明を心がける必要があったことである。スライドに載せた英文、話す言葉の中に5歳の子どもたちにとっては難しい箇所があっただろう。英語で話すことに気を取られ、「わかりやすい英語」という意識が足りなかった。もっとわかりやすい言葉を使っていたら、子どもの日への理解を深めることができたのではないと思う。

2点目は、授業者の英語力の低さである。活動の説明をしている時、机間巡視をしている時、活動の切り替えの時、子どもが発表した後のコメント等で担任の先生に多くのフォローをして頂いた。英語を聞き取ることができ、話すことができたなら、もっと子どもの日について伝えることができたように思う。

【自己の変容】

本プログラムへ参加したことで、日本の教育しか知らなかった、日本の教育にしか目を向けていなかった自分に気付くことができた。その妨げとなっていたのは、英語力への自信の無さだろう。しかし、その苦手な英語に向き合い、授業を無事にやり遂げたこと、アメリカの先生や学生とコミュニケーションをとったことは、自分にとって大きな自信となった。伝わった時の喜びは大きく、苦手であってもジェスチャー等を使えば何とかなると思うことができ、「やってみよう」という挑戦心まで湧いてきたことは大きな変化である。この気持ちの変化が、国際理解への一歩を踏み出したように感じている。

第2学年 図画工作科 “Let’s draw summer on “Uchiwa”!”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 吉田 梨 声

1 ねらい

この授業では、うちわを取り上げて進めていく。うちわは、授業者の出身地である香川県での生産が有名だ。また、うちわは昔から日本の夏に暑さをしのぐために使われることから、うちわの面には日本の夏の風物詩が描かれているものが多い。それらを紹介することによって、アメリカの子どもたちが日本の文化や夏の風物詩に興味を持てるようにする。また本授業では、子どもたちがアメリカの夏のイメージについて考え、オリジナルのうちわを制作する活動を取り入れる。その際、あらかじめ材料を十分に用意しておき、子どもたちが自由にイメージを広げながら装飾を工夫できるようにする。

2 概要

- (1) 授業者の出身地である香川県はうちわの生産が有名であり、また、うちわは昔から日本の暑い夏に涼しさを味わうために、扇いで使われていることを学ぶ。
- (2) うちわの面には日本の夏の風物詩が描かれているものが多いことを知り、様々な日本の夏の風物詩に興味を持つ。
- (3) アメリカの夏のイメージについて自分自身で考え、うちわの装飾で何を描くか決める。
- (4) マーカーや折り紙、カラーセロハンなどを自由に用いて、自分のイメージに合ったオリジナルのうちわを制作する。片面は絵を描き、もう片面には漢字の「夏」を書く。
- (5) 完成したうちわを実際に扇いでみたり、友だち同士でうちわの装飾の鑑賞をし合ったりする。

3 成果と課題

本授業を通して、うちわや日本の夏の風物詩について関心を示し、意欲的に活動に取り組むアメリカの子どもたちを見ることができたと思う。うちわを知っている子どもはクラスに一人もおらず、見本のうちわを扇いで見せたときに、子どもたちは驚きの表情を浮かべていた。また、日本の夏の風物詩に関しては、ホテルやアサガオを本授業で初めて知った子どもが多いようであった。うちわの製作においては、装飾のデザインを考える時間を設けられなかったにも関わらず、子どもたちはマーカーや折り紙、カラーセロハンといった材料を積極的に用いて作業に励んでいた。実際に海や太陽、ヤシの木、ヒマワリ、ビーチボールなどを描く子どもたちが多かった。日本の子どもと比べ、作業の取り掛かりが早いと感じた。また、うちわの裏面に「夏」を書く活動も、難しそうにしている子どももいたが、多くの子どもたちが自分たちの手で見本を模倣しながら書くことができていた。最後には完成させたうちわを実際に扇いでみることで、涼しさを実感することができた。

課題は、授業の最後に日本の夏の風物詩とアメリカの夏のイメージで共通しているものや違っているものを考える時間があれば、より子どもたちの学びにつなげることができたのではないかと感じた。また全体的に時間が足りず、活動の時間が十分に与えられなかった。その結果、片づけの時間も設けられず、担任の先生にお願いする形になってしまった。あらかじめ、ゴミ袋を各ブロックに1つ用意しておき、ゴミが出たときはそこに捨てるように指示しておくべきだったと感じた。

【自己の変容】

アメリカの子どもたちは授業中の反応がとても良く、授業への参加意欲も高かった。また自分が想像していたよりも、日本について興味を持ち知りたがっている子どもが多いと感じた。また自分自身に関しては、授業でなるべくジェスチャーを用いるようにしたり、普段よりも声に抑揚をつけたりするなど、言葉の壁を配慮した心掛けができたと思う。また感性豊かな子どもたちの作品に多く触れ、アメリカの美術教育について興味を持つようになった。

第2学年 異文化理解 “Let’s enjoy Bon dance!”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 原 田 啓

1 ねらい

「日本には、先祖を祀るための盆踊りが室町時代よりあり、先祖への感謝の意を込める文化がある。現在は、その意味合いは弱くなりつつあり、イベントとしての要素が強くなってきているが、老いも若いも楽しめる新しい文化として定着している。盆踊りという独特のリズムをもった踊りを体験させることで、日本の夏を感じ、日本に親しみを持たせたい。」という単元観を設定し、異文化交流として本教材、本単元を設定した。

2 概要

- (1) 自己紹介を行い、授業者が日本のどこから来たのか、また、広島にはどのようなものがあるのかを紹介した。
- (2) タイトルであった“Bon dance”が何であるのかを実際に行なわれた盆踊りをビデオで紹介し、踊っている人たちの服装、持ち物、周りの様子を紹介した。また、授業者が片面に「涼」と書き、片面に日本の夏の風物詩が描かれた竹製うちわを配布した。
- (3) 盆踊り「炭坑節」を“Dig, Dig and dig. Carry, carry, back and back. Push, push, open Chochon-no-chon”の動作の掛け声と共に練習し、最後は円を作り踊った。

3 成果と課題

本授業実践の成果として、児童が盆踊りを楽しみながら日本の文化に触れることができたという点を最大の成果として挙げたい。初めて出会うダンスに当初は若干の戸惑いを見せていたものの、うちわを手にした時の笑顔や、踊りの動作を覚えようと、授業者が作成したレクチャービデオを見ながら一生懸命練習している様子は印象深いものであった。また、踊りを円になって踊り始めると“Dig, Dig and dig. Carry, carry, back and back. Push, push, open Chochon-no-chon”と声を出しながら踊っており、盆踊りそのものを身体全体で味わうことができたと考える。

課題としては、児童中心の授業への配慮に欠けた面があったことを挙げる。導入部で、授業者が提示したい事柄に意識がいきついで、児童の実態に配慮が行き届いていない場面もあった。具体的には、小学校2年生の段階で、世界遺産に関する話は、理解するのに困難なようであったということである。担任のBarbara先生が児童にわかりやすい言葉に、私の英語を直してくださる場面も多々あり、言葉の持つ重要性にも気づくことができた。言葉1つをとってみても、そこに児童の理解への配慮がなされているのか、内容は児童の発達段階的に適したものであるのか、この点は、日米を問わず共通の授業課題であると考えられるため、今後活かしていかなければならない。

【自己の変容】

実地研究に参加するにあたって抱えていた不安というものは、実際に過ごしていく中で軽減されていったように思う。言葉の壁という不安は、動作や、表情といった非言語面での振る舞い、相手が理解してくれようとしている様子から、乗り越えることができたと感じ、盆踊りに関しても積極的に児童は踊っていたように感じている。特に、コミュニケーションの際には、気持ち次第で乗り越えることのできる要素というものが多いうことを、各小中学校の先生、生徒、ECUの学生との交流等を通じて実感することができた。ECUの学生との交流の際には、同年代や同じテーマに関心がある者同士ということもあり、拙い英語ながらも笑顔を交えながら交流することができたことが印象的である。

また、アメリカで出会った多くの方の声に出して伝えるという「思いやり」の心に触れることができたことも大きな出会いであった。言葉で伝える重要性というもの意識することができたので、これを意識して実践し、将来的には私の児童・生徒に伝えていくことができると考える。

第3学年 異文化理解 “Let’s make a kamishibai!”

教育学研究科 学習科学専攻 学習開発基礎専修 福岡 晃子

1 ねらい

紙芝居の鑑賞と作成を通して、日本の伝統的な文化に親しみをもってふれ、さらに想像力や思考力の向上を目指した。

2 概要

- (1) パワーポイントを用いて自己紹介をし、さらに日本文化の学習の導入としてつながるように、日本についてのおおまかな紹介を行った。外国人に対しての不安を取り除けるように、子どもとの対話を積極的に行った。子どもたちも日本の文化に対し大きく反応を示し、とても興味を持って目を向けてくれていた。
- (2) 子どもたちに紙芝居の実演を行い、その後紙芝居の歴史や演じ方についての説明を行った。また日本の子どもが作った紙芝居を紹介し、親しみを持って活動に取り組んでもらえるようにした。
- (3) 助け合いながら授業を行えるように、グループを作って活動を行った。一人ひとりの机を周り、作業があまり進んでいない子どもには、一緒に文章を読んで想像が深まるような声かけを意識して行った。また進んでいる子どもに対しては、良い点をしっかり伝えて、周囲の子どもへアドバイスできるように声かけを行った。個人によって進行度が大きく違い、作業時間を計画よりも多く取ることとなった。
- (4) 実際に子どもたちに紙芝居を演じてもらう予定であったが、時間が足りず、子どもの作ったものをストーリー順で紹介するまでになってしまった。またクレヨンで手や机を汚してしまう子が多く、後始末にも時間を大きく割いてしまった。

3 成果と課題

本授業の成果としては、以下の2点が挙げられる。まず1点目は、個々の子どもたちが進んで活動に参加し、異文化を楽しんで受け入れようとしてくれたことである。授業中は進んでわからないことを尋ねてきてくれ、また日本文化を紹介する度に大きな反応を示してくれていた。2点目は、馴染みのないストーリーから想像的に絵を描くという難題に挑戦してもらったのだが、それぞれがグループ内で交流を行いながら、作品を仕上げている様子が見られたことである。

課題としては、作業に思った以上に時間がかかってしまい、紙芝居の実演までを子どもたちに味わってもらうことができなかったことである。担任の先生のサポートを受けて、なんとか形にすることができたが、内容的にも45分の授業でこなせるものではなかったため、限られた時間の中でどの活動に一番重点を置くべきかを、熟考する必要があると感じた。



【自己の変容】

体験型教育実地研究を通して、私は学校教育のあるべき姿について考えを深めることができたと感じている。本プログラムで見学させていただいたどの学校においても、全ての子どもに対して一律的な教育を教授するのではなく、個々の特性を認めた教育を行っていた。自分の学校について胸を張って語る子どもの様子や、常に子どもたちを気にかけて声をかける教師の様子など、至る所でその成果を見ることができたように思う。学校教育にとって本当に大切なのは、子どもの学力を伸ばすことではなく、子どもが生きていくために必要なことを教えていくことだと考えることができた。

第3学年 異文化理解 “Let’s send your message with the ‘Tairyobata’ !”

教育学研究科 学習科学専攻 カリキュラム開発専修 中川 琢 麻

1 ねらい

今回、筆者が日米两国で行った授業のねらいは、二国間の子どもの国際交流を図り、子どもたちの目を世界へと広げるとともに、世界の同じ年齢の子どもがどのような思いや願いを持っているのか、子どもに気づかせることであった。ここでは、アメリカで行った授業の3点のねらいを挙げておく。

- ・大漁旗を制作する活動を楽しむことができるようにすること。
- ・日本の大漁旗に込められた思いや願いから、日本の子どもたちに伝えたいメッセージを考えること。
- ・日米の小学生の作品交流を通して、日本の子どもたちが持っている思いや考えに気づくこと。

2 概要

- (1) 日本にある大漁旗を実物で紹介したり、実際に漁船に掲げられている様子を写真で提示したりすることを通して、大漁旗には、人々の大漁や安全、家族の安全や成長への思いや願いが込められていることを理解できるようにした。
- (2) 日本の小学生が作製した大漁旗及びビデオメッセージを提示し、日本の子どもが持っている思いや考えに気づき、自分が大漁旗に書くメッセージを考えさせるようにした。
- (3) 三つのグループに分かれて大漁旗にメッセージを書いたり色を塗ったりして、大漁旗を完成させ、日本の小学生へ贈るビデオメッセージを撮影した。

3 成果と課題

本授業の成果として、第一に、日本とアメリカの小学3年生がそれぞれ大漁旗を製作、交換したことで、海外の同級生がどのような夢を持ち学校生活を送っているのかについて知り、文化や考え方の共通点や差異に気づくことができたことが挙げられる。両国の小学生は、本授業を通してこれまでの日常生活で感じることはできなかった世界を知ったことで、グローバル意識が芽生え、その多様性を認めていこうとする意識が高まったのではない。

第二の成果は、アメリカの児童にペンを使って布に描くという表現活動を経験させることができたことである。アメリカの小学生にとっては、普段の授業では経験することができない貴重な体験であったようだ。アメリカの小学生も日本の小学生と同様に、大漁旗を鮮やかに仕上げたり、メッセージを書き込んだりするなど、意欲的に活動に取り組んでいた。

一方で、本授業の課題は、大漁旗が持つ意味、すなわち、思いや願いが込められた旗であることについての説明が不十分で、製作する大漁旗にも思いや願いを込めるという児童の意識が弱くなってしまったことである。活動の場面でも、児童に対して再度説明する、質問するなど教師の働きかけが必要であった。大漁旗がある意味、つくる意味についても十分に理解させることで、本授業における表現活動や大漁旗を用いた国際交流の意義がより深まったと考える。

【自己の変容】

本授業で痛感したのは、授業の準備の大切さである。日本で授業を行う場合、言葉が通じるので授業の細かい部分まで気を遣うことは少ない。しかし、アメリカでは、言葉もうまく通じず、教室文化や学校文化も日本とは異なる。その中で、自分の伝えたいことを授業の中で子どもにどうわかってもらうか。今回は、資料や発問、活動の細部にまで目を配り準備を行った。特に留意したのは児童の実態である。小学校3年生の実態に即した授業を追究することで、子どもたちの意欲的な活動につながるということがわかった。これまで当たり前だと思っていたことが伝わらないという経験したことで、伝えたいことを伝えるための授業準備の大切さを再認識させられることとなった。

第4学年 異文化理解 “Let’s feel common and different points of between U.S. and Japan!”

教育学研究科 科学文化教育専攻 社会認識教育学専修 守 谷 富士彦

1 ねらい

私が考える異文化理解は、単に互いの文化を伝え合うだけでは達成しない。文化の違いを感じながらも互いの共通点を感じ取るという経験によって互いの国やそこで暮らす人々を身近に感じ、真の異文化理解につながると考える。そこで本授業では、挨拶、身近なもの、創造的活動と心理テストの結果の日米比較を通して、子どもたちがアメリカと日本の共通点と相違点を感じることをねらいとした。

2 概要

- (1) グリーンビルにある日本食レストラン「FUJI JAPAN」を交えて自己紹介を行った。
- (2) 授業の導入として世界地図で日本の位置を探し、日本とアメリカで使われている世界地図を比較して違いを感じ取らせた。このように日米の文化を比較する中で共通点と相違点を感じるという授業のねらいを伝え、授業の流れを説明した。
- (3) 日本式の挨拶をした後にジャンケンをして名刺カードを奪い合う名刺交換ゲームを通して、挨拶の仕方やジャンケンのかけ声の違いを感じ取らせた。
- (4) 食器、お金、新聞など日本とアメリカで共通点や相違点の多い身近なものの写真や実物をみせ、What do you think?と発問をしながら比較させた。また、子どもたちにとって身近である学校の教室の様子や給食の日米比較も行い、興味津々であった。
- (5) 丸いものといえば?と発問し、思いつくものを5分間描かせた。事前に日本の小学6年生に同様の授業を行い、その際に描いた丸いものの絵を提示して比較させた。色彩の違いを感じると共に、太陽、月、時計、地球など丸いもので同じものを思いつくことができ取ることができた。
- (6) 心理テストを行い、事前に準備していた日本の小学生を対象に行った結果と比較させた。研究に基づく西洋と東洋で結果が異なるテストであったが、多くの子どもが日本の子どもと同様の回答をし、共通点を感じ取った。
- (7) 日本とアメリカの文化の違いの中に多くの共通点があることを伝え、授業をまとめた。



日本の給食の様子をみる児童

3 成果と課題

本実践の成果は主に二点挙げられる。第一に、日本の特徴的な文化を単に伝達するカタチとは異なる異文化理解教育のあり方を提示できた点である。文化の違いの中の共通点を多く紹介した本実践は、より異文化を身近に感じさせることが出来ただろう。第二に、異文化で暮らす人の感覚的な共通点を感じ取らせられた点である。「丸いもの」や心理テストの結果の日米比較を通して得られた感覚的共通点は、異なる文化の中で暮らしている人でも同じ感覚を持っている、という異文化に暮らす人の理解を促したのではないだろうか。一方で、課題もある。本実践を通して実際にどの程度の異文化理解をさせることが出来たか不明である。より充実した子どもとの英語のコミュニケーションをすることで、理解の程度を評価することが出来たと共に、より豊かな異文化理解を促すことが出来たのではないだろうか。

【自己の変容】

アメリカで暮らす人々、先生方、子どもたちとのコミュニケーションを通して、アメリカ・日本という国と国ではなく、人と人のつながりを感じることができ、自分自身の異文化理解が深まった。英語という言語だからこそインタラクティブに会話し、一緒に笑い合えた、そのような刺激的な経験は自身の英語・外国・外国人に対する認識を変容させ、もっと外国の人と関わりたいと思えるようになった。

第4学年 異文化理解 “Let’s present “Osechi ryori” in a layered box!”

教育学研究科 学習科学専攻 学習開発基礎専修 谷 沙 織

1 ねらい

日本の正月には御節料理を食べるという文化があることを知る。御節料理を重箱に盛り付ける体験を通して、和食の持つ「おもてなしの心」に気付き、自分たちの生活に生かすことができる。

2 概要

- (1) 導入ではスライドショーを用いて自己紹介を行い、自分の誕生日である七夕という年中行事から日本とアメリカにおけるその他の年中行事とその日に食べられる食事について発展させた。また、七面鳥やアイシングクッキーがなぜクリスマスに食べられているか尋ね、「食べられているのには意味がある」ことに気付かせた。その後、日本の正月について紹介し、アメリカにおけるクリスマスと同様に、日本では正月に特別な思いを持って祝い、食事をしていることを話した。
- (2) 次に、日本の正月に食べられる「おせち料理」とは何か、紹介した。その際、ただ説明するのではなく、子どもたちにおせち料理の写真を何枚も見せ、どのような特徴があるかを尋ね、子どもたちの気付きをまとめるようにした。
- (3) 子どもたちの意見を集約し、今回の主活動である「おせち料理を詰める」体験へとつなげるために、おせち料理は重箱に詰められていることに注目させた。おせち料理が重箱に詰められているのは「福を重ねる」という意味付けの他に、新年の挨拶のために訪れた人たちに振舞うためという役割があることを説明した。そうすることで「相手のために」という日本のおもてなしの心への糸口となるようにした。
- (4) 次に本時の主活動であるおせち料理の粘土細工を重箱に詰める活動を行った。クラスを5つのグループに分け、自由に盛り付けるよう促した。その際のポイントとして、新年の挨拶に来た人が喜ぶような盛り付けにすることや料理一品一品に意味があり、その意味を考慮して詰める料理を選ぶことなどを話した。
- (5) 最後に、グループごとに自分たちの盛り付けたおせち料理を発表する場を設けた。

3 成果と課題

本時の成果として、子どもたちが楽しみながら活動に取り組むことができたことが挙げられる。また、子どもたちとたくさん交流できたことは、私にとって忘れがたい思い出になっただけでなく、子どもたちにとっても刺激になったと信じている。しかし、異文化理解の目標である「共生社会の実現」に繋がる学びが生まれたかは疑問である。文化間の交流を深めることが課題の一つだと感じている。

【自己の変容】

私はこれまでも海外渡航の経験が何度かあり、もともと外国への恐怖はあまり感じていなかった。自分の英語力には自信がなかったが、今までの経験から、英語は伝わらないなりに心は通じるだろうという予期があり、不安は少なかった。ただ、今回はアメリカの地で、英語で授業をするということで、今までにない緊張を覚えた。実際、授業をしてみて、自分より一回りも幼い子どもたちが、私のつたない英語を理解しようと必死に聞いてくれたり、積極的に交流を図ってくれたりしたことに感動した。

日本では、自分の言葉が通じる前提で交流してしまう。そのせいで、自分の意図が相手に伝わらないことがあるとつい、相手への感謝の気持ちを忘れ、イライラしてしまったり、伝えることを諦めてしまったりしてしまう。しかし、今回、目の前の相手が自分を理解しようと一生懸命になってくれた姿を見て、自分の意図が伝わるのは相手が理解しようとしてくれたからだということに気付くことができた。日本にいると忘れがちだが、相手への感謝の気持ちや尊敬の念を持って、人と接していきたいと思う。

第5学年 異文化理解 “Let’s exchange by Japan-U.S. school culture!”

教育学研究科 学習開発専攻 初等カリキュラム専修 神野幸隆

1 ねらい

日米の小学生同士、ビデオレターを通して交流を行う活動である。日本の外国語活動の教科書にあるクイズを作る単元を日米の学級で行い、互いに出し合って交流を図る。その際にクイズとして作成する物には、文化的な要素や背景を含む物とし、よりよい相互の文化交流を図るようにする。

2 概要

- (1) 手品を用いた自己紹介や前所属校の学校紹介を行う。自己紹介の後に日本の英語活動の教科書 Hi Friends の5年生に掲載されている単元「What's this?」を使用し、日本の子どもたちからアメリカの子どもたちに2問のクイズ（上履き、防災頭巾）を出す。
- (2) 日本側のクイズに解答した後、2つのグループでそれぞれ1問ずつ日本にはない物をクイズとして作成する。ビデオに撮影し日本に持ち帰り、日本の児童にクイズを出す。

3 成果と課題

アメリカ側は「スナック菓子」と、「ウィスパーリーディング」をクイズとして作成した。「ウィスパーリーディング」とは一人音読用の機材で、耳と口がつながるパイプである。非常にユニークな物をクイズとして作成してくれた。日本の児童にクイズを出すのが楽しみである。なぜ必要なのかというと学習形態が日本とは違い、小グループでのモジュール学習を行っているためだろう。多くの教室を参観したが、「先生の机で学習→PC学習→音読やドリル（計算）」という3チームでローテーションして学習している。上記の成果の還元方法としては、前所属校に今回の訪問校の報告書を届けたい。また全校朝会において報告する機会を得ているので、全校児童の前で写真を提示して学校文化の違いや共通点を中心に伝えていく。

【自己の変容】

お互いをよく知ることから国際理解は始まる。無理解は誤解を生む。お互いの文化の違いを違いとして認め、尊重することが国際理解の土台となる。だから直接自分の目で見て触れることが大切である。私が感動したのは、ECU大学にて教育学部生の学生とディスカッションを行った時である。少人数のグループに分かれて日米の学校の共通点と差異について話し合った。30人程度の学生の中に、40歳を超える方が、数名在籍していた。始めは教授かなと思ったが、学生であった。セカンドキャリアとして40歳を超えてから教師になるために学んでいる。まさに学びたいときに大学に戻れる社会であり、多種多様なキャリアをもった教員がいて素晴らしいと感じた。次に、普段の旅行では、お土産をあまり買わないため、帰国にむけてしだいに荷物が軽くなって行く。しかし、今回はことある事に色々な物を頂き、しだいにスーツケースが重くなっていく旅行だった。それだけ、至る所でおもてなしをされた。もっとビジネライクなアメリカとイメージしていたが全然違った。客人をもてなすという気持ちは世界共通だと感じた。最後にチャータースクールのエクスペリリス校を訪問したことである。ないものねだりをするのではなく、ある物を最大限に有効活用していくことが大切であることを学んだ。狭い敷地を有効に活用して学校を運営していた。自分自身が世界を知り、視野が広がることで、自分自身を変容することがグローバルマインドの変容につながった。最後に、貴重な機会を提供して下さった先生方に、感謝申し上げます。



第6学年 異文化理解 “Let’s experience a gesture of Japan!”

教育学研究科 科学文化教育学専攻 社会認識教育学専修 山田 薫

1 ねらい

異文化間のコミュニケーションにおいては、言葉だけではなく、表情やジェスチャーを使うことも大切である。その時、文化による違いを知っておかないと、誤解を生んでしまうことがある。本授業では、日本とアメリカのジェスチャーの意味を分かる活動を通して、文化による違いや、共通点を知り、将来海外に行くときに生かすことができるようになることをねらいとしている。

2 概要

- (1) 1つ目の活動として、どの「写真カード」がどの「意味カード」を表しているかを考えるクイズをグループで行った。子どもたちは相談しながら、写真の意味を考えていた。全ての班が写真と意味を一致させた後、全体でスライドを用いながら答え合わせを行った。全9問だったが、どの班も8～9割正解していた。答え合わせをしながら1つ1つのジェスチャーを全員で実際にやってみると、どのジェスチャーも大きな声でしっかりとやってくれた。
- (2) 9つのジェスチャーの意味を理解した後、グループごとに簡単な劇を作る活動をした。必ず学んだ日本のジェスチャーを最低3つ入れることをルールとして行った。発表する際には、全ての班が発表したいと手を挙げ、前で演じた。結果、半分以上の班が上手く3つを取り入れ、「昼休みの様子」や「友達を遊びに誘う」というようなストーリーを作っていた。

3 成果と課題

本授業の成果について1点、課題について2点述べる。

まず、成果として日本のジェスチャーをどの場面でどう使うかを理解できたことが挙げられる。授業前は、劇を考える活動を初めてみた日本のジェスチャーを使って考えることができるのかとても不安であった。しかし、実際は半分以上の班が内容のしっかりしたストーリーの中で、日本のジェスチャーの使い方を間違えることなく演じることができていた。このことから、カードを使ったクイズとその説明を通してそれぞれのジェスチャーの意味をしっかりと理解することができていたと言える。

反対に、課題の1つとしてローマ字が伝わらなかったことが挙げられる。クイズの際用いた意味カードは英語の意味と、日本語の言い方を載せていた。しかし、子どもたちにとってローマ字はあまり読む習慣がないようで、劇を作る際何度も「日本語をもう一度教えてほしい」との質問を受けた。日本語とジェスチャーを合わせて教えることで、日本の理解にはつながったが、多少難しかった点が課題である。もう1つは、説明が上手く伝わらないことが何度かあった点である。クイズの説明や、劇を作る際のルールの説明は円滑に進むようにスライドで提示したのだが、一度で伝わらないこともあり担任の先生が伝え直してくれたおかげで授業を進めることができた。事前に英語の文を考えてきても、伝わる英語になっていなかったことが課題である。

【自己の変容】

実際に行った授業内での子どもたちや、学校の先生、泊まったホテルや店の店員など、アメリカで多くの人とのコミュニケーションがあった。話せない、聞き取れないことは多々あったが、拙い英語でもなんとか会話ができたり、授業で子どもが理解してくれたりという経験を通して、アメリカに行くまでに感じていた異国の壁のようなものは取り払われたように感じる。もちろん、英語をしっかりと話せることは大切なことであるが、気持ちやジェスチャーを通して国が違って通じ合うことができるという実感を得ることができた。

第6学年 異文化理解 “Let’s design “Four Cell Manga”!”

教育学研究科 科学文化教育学専攻 社会認識教育学専修 河原 洗 亮

1 ねらい

本授業は、以下の2点をねらいとして実践した。

- ・日本の文化として、4コマ漫画について理解する。
- ・ストーリーを「起承転結」に則って論理的に構想し、実際の4コマ漫画づくりを通して表現する。

2 概要

- (1) 導入部では、Power Pointで作成したスライドを使って教師の自己紹介、日本の食文化や伝統的なスポーツ、アニメ・漫画についての簡単な紹介を行った。子どもたちは、日本という異国の文化や日本人である授業者に対して強い興味関心を示しているということがうかがえた。
- (2) 展開部は、まず、実際の4コマ漫画を具体的に示しながら、4コマ内で「起承転結」の基本構造が取られストーリーが展開されていることに気づかせた。次に、コマシートやワークシートを活用して、個人で「起承転結」に則ったストーリーの論理性を意識させ4コマ漫画を作成させた。
- (3) 終結部では、作った4コマ漫画を教室に整備された書画カメラを使って、教室全体で発表させた。

3 成果と課題

本授業実践の成果と課題について、ここでは1点ずつ述べたい。まず成果として、クラス全員(23人)が4コマ漫画について理解し、「起承転結」を意識しながら作品を完成させることができたことが挙げられる。実際の授業の中で子どもの様子を観察していたところ、一般的なコミックやマンガはアメリカの子どもにとっても身近なものではあるが、4コマ漫画を知っている子どもはほとんどいなかった。そのため、コマ数に大幅な制約がある中で「起承転結」のルールに則った4コマ漫画を作成することは難しく、子どもの中には作品を完成するに至らない子どももクラスにいると想定していた。しかし、実際の授業で4コマ漫画の作品例を多く示したことにより、4コマ漫画について初めて知った子どもも4コマ漫画について理解し、コマシートを使って個人で4コマ漫画を作成することができた。

次に、課題としては、コマシートが子どもの自由な4コマ漫画づくりを阻害していたことが挙げられる。4コマ漫画を作成するにあたり、ストーリーの構想し、絵を描き、吹き出しを書くという一連の過程をすべて行うことは時間的に難しいと判断し、絵がすでに描かれたコマを使用した。しかし、実際の授業では、学校内で比較的に学力の高い子が集められたクラスでの授業実践であったということもあり、1つの作品を作るのに想定していたほど時間を要さなかった。また、回収した作品を分析したところ、学校での出来事を題材とした作品が多くを占め、子どもの作品として多様性があまり見られなかった。より子どもの自由な発想を表現させるために、無地のコマシートも使わせつつ、絵を描くのが苦手な子にはすでに絵が描かれたコマシートを使用させるといった柔軟な対応が可能な準備が必要であった。

【自己の変容】

これまで自分は、コミュニケーションとは言語そのものであると考えていた。しかし、拙い英語でも表情やジェスチャー、写真などを巧みに織り交ぜることで相手に自分の思いや考えを伝えることができた場面が本実地研究中に何度もあった。その時に私は、言語はあくまで自分の思いや考えを伝えるための数ある方法のうちの1つに過ぎないということを実感することができた。

この10日間、言語で十分に思いが伝えられないときは、話し方や表情・ジェスチャーを工夫したり、写真を見せながら話したりするなど、日本では無意識的に行っていたことに、気を遣うことを強いられた。その結果、言語に依拠しないコミュニケーション能力が向上したのではないかと考える。これは、どんな相手であってもコミュニケーションを円滑にとるために必要な能力であるといえるだろう。

第7学年 異文化理解 “Let’s draw the picture letter with the Kumano brush pen. -Message of your dreams-”
教育学研究科 科学文化教育学専攻 社会認識教育学専修 齊藤 弘樹

1 ねらい

本授業では、大きく以下の2つをねらいとして設定した。

- (1) 私が在職している熊野町は、「筆の都」といわれるほど筆の生産地であり、熊野筆は伝統工芸品として日本では知られている。この筆を使ってアメリカの中学生に絵てがみを描かせ、慣れない毛筆や画筆を扱うことで、日本の文化を紹介していきたい。
 - (2) 絵てがみのテーマを「私の夢」とし、日本の中学生とアメリカの中学生が将来の夢をどのように捉えているか、活動を通して比較していきたい。
- 以上のことを通して、日本とアメリカの中学生にとって異文化理解につながると考えている。

2 概要

- (1) 事前に熊野筆などの入った封筒を配布し、授業で熊野筆を使って「私の夢」について絵てがみを描くことを伝えた。
- (2) 導入では、パワーポイントを用いて、広島観光地や熊野筆についての紹介を行い、日本の中学生の描いた絵てがみを見せて、イメージをもたせた。
- (3) 展開では、筆を使って半紙に練習させた。慣れてきた生徒から清書に取り組ませた。毛筆で「将来の夢」を英語で書き、それを画筆でイメージした絵を描いてもらう。最後に自分の名前のサインを書いて完成とした。
- (4) 完成した生徒から作品を持って写真を撮った。作品を提出してもらい、かたづけに入った。最後に将来の夢について応援のコメントをし、授業をまとめた。

3 成果と課題

本授業の成果として2点をあげる。第1は、パワーポイントを用いて授業を行ったため、初めて筆を使った生徒も視覚的な情報を通して理解していた。また、全員の生徒が時間内に作品を完成し、写真を撮ることができた。第2は、本授業において教材の事前準備ができていたことから、計画に基づいて取り組めたことである。

課題としては英語のコミュニケーション能力であった。準備してきたことしか話せないため、生徒の発言を受け入れる余裕がなく、絵てがみに描かれた夢についてもコメントができず、ただほめることしかできなかった。担当の先生に補助していただく場面も多かった。

【自己の変容】

熊野筆で絵てがみを描く活動を通して、生徒からなぜ日本人はこのような書きにくい筆を使うのかという質問があり、その場で答えることができなかった。現在では日本人も日常生活ではほとんど筆を使っていない。改めて伝統文化を学ぶことの重要性を感じた。書く時の姿勢はとりあえず説明したが、生徒のほとんどが足を組んで書いていた。改めて日本の文化は姿勢が根本であると感じた。

また、日本とアメリカの中学生の「私の夢」について気づくことがあった。日本の中学生は全員が職業とつながっていないのに対して、アメリカの中学生は具体的な職業をあげており、現実的に将来を受け止めて考えていると感じた。その中で印象に残ったことは、「平和」を描いている夢の作品がいくつかあり、共通して考えていることは一緒だと感じた。

最後に英会話ができたら、どれほど外国で楽しく充実できるかを感じる研修であった。これから勉強したいという意識が高まった。

第8学年 異文化理解 “Let’s express peaceful visions for the future!”

教育学研究科 科学文化教育学専攻 社会認識教育学専修 竹内和也

1 ねらい

本単元のねらいは、『RUNNING WITH COSMOS FLOWERS The CHILDREN of HIROSHIMA』のストーリーを紹介し、「戦後まもなく苦しい生活の中で、小学校の子供たちがどのような思いを絵に込めて描いたのか」、「その絵がどのように日米两国をつなぎ交流を持ったのか、またその交流の良さは何か」を考え、それを通して、平和のための国際的な関係や平和な未来のビジョン（「peaceful visions」）を考え、発表・交流することである。

2 概要

- (1) 導入部においては、簡単な自己紹介と広島のお好み焼き、レモン、もみじ饅頭と文化（厳島神社）を紹介したのち、被爆経験（原爆ドーム、本川小学校、1945年8月6日原爆投下）について話し、歴史的背景を押さえたうえで、『RUNNING WITH COSMOS FLOWERS』の主人公はなこ（物語上の仮称）が描いた絵を見せた。
- (2) 展開部では、紙芝居で『RUNNING WITH COSMOS FLOWERS』を朗読し、そののちに、「本川小学校のこどもたち（登場人物）が何の絵を描いたか」、「なぜ書いたと思うか」などの、子供たちの絵にどのような思いが込められていたかについてや、「1947年に日米間でどんな交流があったか」などの日米間の交流やその良さは何かについて問いかけた。
- (3) 終結部では、「『peaceful visions』を表現しよう」と提案し、「peaceful visions」として①平和のためにしようと思うこと ②将来実現してほしいこと ③私の夢の3つのテーマから、1つ選び書かせた。



図 「peaceful visions」(成果物)

3 成果と課題

本実践の成果は、以下の2点である。第1に、日本、特に広島で取り上げられた『RUNNING WITH COSMOS FLOWERS』のストーリーの中の、平和に向けた国際交流の実際をアメリカのこどもたちに伝え、理解させることができた。第2にストーリーの理解を通して、平和な世界の実現への願いやその実現に向けた行動や意思表示を生徒に考えさせることができた。

一方で、本実践の課題は、平和に向けた生徒の意見をより交流させ、他者の意見を受けて深めることができなかった点である。私はこの課題の原因として以下の二点を考える。第1に、自分自身の英語力の低さである。第2に、子どもや教師の意見同士をぶつけ合う（交流する）展開がなかったことである。

【自己の変容】

自己の変容として、授業実施を通しての、グローバルマインドへの気づきを以下に示す。

私は、授業で平和というテーマを通して、子どもたちと意見を交えるという試みをしてみて、グローバルに物事を考えることの第1歩は、他者と実際に話してみること、または一緒に取り組むことであると考えている。本実践を通して、子ども達が描く「peaceful visions」に触れて、アメリカの子供たちの描く平和の規模の大きさや、感覚の違いに驚かされ、また、そこから考えさせられた。立場や文化等様々異なる他人と、同じテーマに取り組むことを実際に経験し、多くの気づきを得て、その差異や気づきをさらに交流させていくことが、グローバルに物事を考える1歩だと考える。

4 本年度の授業の整理と考察

(1) 本年度の授業

2015年度体験型海外教育実地研究（米国ノースカロライナ州）において実施された授業は、次のとおりである。

表1 実施授業の学年と教科等

学生	指導学年	教科等, 題材・テーマ*
A	幼	異文化理解 Let's enjoy Children's Day!
B	2	図画工作科 Let's draw summer on "Uchiwa"!
C	2	異文化理解 Let's enjoy Bon dance!
D	3	異文化理解 Let's make a kamishibai!
E	3	異文化理解 Let's send your message with the "Tairyobata"!
F	4	異文化理解 Let's feel common and different points of between U.S. and Japan!
G	4	異文化理解 Let's present "Osechi ryori" in a layered box!
H	5	異文化理解 Let's exchange by Japan-U.S. school culture!
I	6	異文化理解 Let's experience a gesture of Japan!
J	6	異文化理解 Let's design "Four Cell Manga"!
K	7	異文化理解 Let's draw the picture letter with the Kumano brush pen. - Message of your dreams -
L	8	異文化理解 Let's experience peaceful visions for the future!

*「教科等, 題材・テーマ」は、参加者（授業者）が付したものであり、授業を実施した当該校にとっては教育課程外の投げ入れ授業として位置づけられるものである。

(2) 事前の取り組み

参加者は、日本での事前学習会において、授業の目標、内容、教材、学習過程などについて互いに協議・検討し、具体的な準備を進めた。また、英文の指導案を作成し、7月に実施した授業研究ワークショップにおいて、実習校であるエッペス中学校のアリソン・キリー先生と、訪問校である

エクスペローリス中学校のメレディス・チータム先生より、教材構成についての助言や児童生徒の実態に基づく助言をいただき、指導計画の改善を図った。授業実施学年については、参加者の希望と指導内容を考慮して調整・決定した。さらに現地では、受け入れ校の関係教員と事前の打ち合わせ会を行った上で授業に臨んだ。

(3) 授業についての考察

本年度の授業について、主な成果と課題を以下に示す。

① 教材開発の状況と傾向

参加者は、各自の問題意識や専門領域の特性を生かし、新たな教材の開発を行った。テーマとしては、祝日（子供の日）、うちわ、盆踊り、大漁旗、おせち料理、絵手紙、4コマ漫画といった日本独自の文化を題材にしたものや、日米の考え方やものの見方の相違点・共通点を取り上げたもの、同じく日米の学校文化比較を取り上げたもの、また、1945年の広島で被爆した子どもたちとアメリカの教会との絵画による交流体験を記した書籍を素材とした授業もあった。既存の教材の解釈ではなく、自ら新たな教材を考案・構成した経験は、参加者の教材開発力の育成に資するものであったと考える。

開発された教材は次のように分類することができる。

【日本の文化を体験を通して理解する教材】

A, B, C, D, E, G, J, K

【日米の文化比較を促す教材】

F, H, I

【願いや思い、夢を引き出す教材】

A, E, K, L

【深い思考を促す教材】

F, H, I, J, L

当然のことながら、対象学年が低い場合には、実際に体を動かしたり、制作を行ったりすることを通して日本の文化に触れ、理解を促すような実践が多かった。日米比較を促す教材として、3実践を挙げたが、小学校低学年の取り組みも含め、全ての実践が日本文化を題材にしての交流を通して、児童・生徒がアメリカの文化や自らの生活、夢等について気づき、考えを深めるような内容になっていたことは言うまでもない。

本年度は、特に高学年・中学校の実践において、アメリカの学校文化を題材としたクイズを作る、

起承転結を意識して4コマ漫画を作る、原爆をテーマに平和について考える、といった深い思考を伴う挑戦的な授業が立案された。限られた英語力と授業時間の中でこのようなテーマを扱うことは容易ではなく、大きな挑戦を試みたことは素晴らしいことであった。

② 学習指導の成果と課題

授業に対するアメリカの子どもたちからの積極的な反応や意欲的な取組の様子から、いずれの参加者も一定の達成感を得たことが、前章に掲げた参加者による報告から読み取れる。

また、綿密な授業準備や、児童・生徒からの反応の想定により、授業を通して伝えなかったことが伝えられた、という成果を得た参加者もいた。これを可能にした一つの要因は、7月に実施したワークショップにおいて現地の先生から現場の様子や児童・生徒の実態を聞いたことであろう。授業は丁寧な学習者の実態・状況把握に基づくべきであるが、訪問者として単発で授業をする大学院生にとっては、この点が最大の課題でもある。アメリカから先生を招いてのワークショップを行うことは、時間・予算の両面から考えても容易なことではないが、授業の準備をより具体的かつ学習者を想定したものにするためには欠かせないものであることを実感した。また、このワークショップが参加者にとっては第1回目の英語を用いての交流体験の場でもあり、英語を使うことへの抵抗感を和らげたり、積極性を養ったりする上でも重要な時間であると感じた。

一方、課題としては参加者による報告に次のようなものが挙げられた。

【英語力不足】

A, K, L

【分かりやすい説明】

A, C, I

【授業時間不足】

B, D

【学び（異文化理解）の達成度】

E, F, G

英語力不足と分かりやすい説明ができなかったとの反省は、共に英語力に関連していると思われる、用意していた英語しか言えず、学習者の発言への臨機応変な対応が十分に出来なかったことや、児童・生徒の学年や既知情報への配慮が足り

ず、難解な表現で伝えてしまった等の反省が見られた。今後は、日本で英語を学習する際の英作文で習ったような表現ではなく、「伝える」ことをもっと意識した準備が必要になるだろう。また、今回実習を行った学校はいずれもICT環境が整っており、電子黒板を使用することが多かった。スライド使用が可能であったからこそ、セリフの全てをスライドに書いておくようなものも見られたが、児童・生徒に見せるスライドは、児童・生徒の理解のためのものであるべきである。幼稚園や1年生を対象とした授業で、指導者が話す内容を英語でスライドに示しても、学習者は理解できず、あくまで指導者が英語に困らないための道具にすぎない。相手の状況を踏まえた授業準備を意識することが今後求められるだろう。

また、参加者による授業は1回限りのものであり、その授業時間は概ね40分程度であった。その時間で何もかもを伝え、体験することは困難である。どこに力点を置くかを取捨選択することが必要であり、また最低限目指すことを明確しておくことが大事であろう。今回、学び（異文化理解）がどこまで達成できたのか、という点について反省を挙げている参加者が複数いた。学年や時間やいろいろな状況を踏まえ、授業の目標や内容を絞り込むことは、内外を問わずどんな授業構成においても重要であり、それを実感することも体験型海外教育実地研究の趣旨でもある。

(4) 参加者の「自己の変容」についての考察

前章に掲げた参加者による「自己の変容」の記述内容から、大きく分けて「言語と非言語によるコミュニケーション」と「国境や言語を超えた『人』人としての思いやりという共通点」に関して、自己変容につながる学びがあったことが明らかになった。

多くの参加者が英語面への不安を抱えながら本体験に参加した。授業や様々な交流を通して、英語が十分でないために、児童・生徒へのコメント等ができなかったり、議論を深めることができなかったりした体験をした者も多く、言葉の重要性に改めて気づく経験となったと思われる。一方で、参加者の多くが、「気持ち」や「挑戦心」があれば、ジェスチャー等を駆使することで、何とか伝え合うことができるということも経験した。それに

よって、言葉は重要であるが、言葉が全てではなく、コミュニケーションを可能にするのは気持ちや心の部分も大きいことを学んだ様子がかがえた。ある学生は「相手が自分（の英語）を理解しようとして一生懸命になってくれた姿を見て、自分の意図が伝わるのは相手が理解しようとしてくれたからだということに気付くことができた」と記述していた。母語であっても、外国語であっても、伝わってあたりまえなのではなく、相手への意識があってこそコミュニケーションが生まれることへの大きな学びと言えらる。

また、現地の先生方が大変親身になって授業中もそれ以外の場面でも、参加した大学院生を支えてくださった。このような交流を通して、文化や習慣に違いはあれども、思いやりの心やもてなしの気持ちは共通しているという気づきを何人もの参加者が記していた。今後は、この学びを日本の教育現場において、次世代を担う子どもたちに伝えていくことであり、それを可能にする体験をしてきたと確信している。

本節の最後に、日本の筆文化を紹介した参加者による次の記述を紹介する。それは「(アメリカの)生徒からなぜ日本人はこのような書きにくい筆を使うのかという質問があり、その場で答えることができなかった。」というものである。私たちは自分たちの周りにあるものを当然のものとして受け止め、そこに「なぜ」と疑問を持って考えることはなかなかできない。筆の件は一例であるが、異文化に触れることによって、また文化の異なる人との交流によって、自らが当然と思っていたことに改めて目を向け、考えることができるようになる。異文化・自文化への敏感さを養う上でも、本体験は意義深いものであったと思われる。

5 おわりに

以上の記録と考察のとおり、今年で9年目となる体験型海外教育実地研究も無事、終了し、教育を通じた国際交流に大きな成果を上げることができた。冒頭で述べたように、今年の参加者は合計12名であった。授業構想から指導案作成・検討を含む事前研修会から、現地教員を招聘しての研修会、本実習、事後指導、報告書の執筆と、参加者の院生諸君はそれぞれの授業・演習や各自の予定を調整しながら、多くの時間をかけて誰もが未体

験の海外での英語による教育実習という活動を終えて、大きな感動と自信を得たことと思われる。以下では今年度の実地研究を振り返り、来年度への研修につなげるため、今後に向けた評価と課題について述べたい。

第一に、今回は参加者が取り組んだテーマの多様性に進展が見られた。大学院生は各自、専門領域や問題意識が異なるため、開発された教材も大変、幅広いものとなった。日本の事情や生活・習慣について解説する、いわゆる「日本紹介型」の授業はほとんどなく、いずれも日本文化・事情を題材としながらも、そこから日米のものの見方や考え方の類似点と相違点を引き出そうとする授業が多く見られた。その中でも、広島での原爆の被害に遭った子どもたちとアメリカの協会との交流といった重たいテーマを扱ったものもあった。また、近年の日本では見られなくなったような伝統的な行事の意味づけなども扱われ、教材研究・開発において例年以上にテーマを深く掘り下げようとする意欲の表れた授業もあった。このような体験は、今後の教材開発力の涵養に資するものと言えるであろう。

第二に、現地の人々との英語によるコミュニケーションにおいて、参加者の積極的な態度が見られたことも、今年度の研修の大きな成果であった。日本語が全く通じない環境に初めて置かれることは、大変な不安を伴うものであるが、毎年、その不安の克服が進んでいるように感じられる。もちろん、参加者による自己研鑽の努力があってこそ実現できたことが多いが、その背景には、現地の人々の献身的な交流や努力による支援があったことは言うまでもない。

最後に、来年度に向けて努力を要する課題について少し触れたい。まず、アメリカ合衆国に対する諸事情の知識・理解をさらに深めていく必要がある。各院生はそれぞれ専門分野を持つため、その研究領域については豊かな知識を持っているが、それを離れた場合、たとえば、アメリカの地理、歴史、政治・経済、メディアなどの一般常識的な部分でさらに幅広い知識を持つことが、より広い地域理解につながると考えられる。特に現地の子どもたちは、生活する地域からほとんど離れたことがなく、自分を取り巻く限られた地域環境が全てであると考えられる傾向があり、子どもたちと

のやりとりを一般化していくには、慎重な姿勢と解釈が必要であろう。

続いて、英語によるコミュニケーションのあり方について、今一度、努力を重ねることを期待したい。特に、話し言葉、スピーキングのみでなく、確かな聞き取り、リスニングが重要である。教育分野については共通する部分が多いため、ついわずかに聞いてそれを一般化して、わかったつもりになってしまうことがある。実習校での授業観察、実施について、現地の担当教員からの説明や、助言、進言などは深く傾聴すべきであろう。時に、私たちは自ら慣れ親しんだ日本の教育というフィルターを通して理解してしまう可能性もあり、しっかりと耳を傾けること、さらにはわからないことがあれば、稚拙でも構わないので疑問点をしっかりと押さえることは、思わぬ発見につながるであろう。「ことば」を通して教科を教える以上、日本語によるコミュニケーションスタイルの特徴をグローバルな観点から再度、捉え直す貴重なチャンスとして、この体験型海外教育実地研究が活用されることを希望したい。

〔参考文献〕

小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第13巻, 2007, pp.43-56。
小原友行・深澤清治・朝倉淳・神山貴弥ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅱ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第14巻, 2008, pp.39-53。
小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人ほか「大

学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅲ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第16巻, 2010, pp.95-104。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅳ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第17巻, 2011, pp.155-168。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅴ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第18巻, 2012, pp.129-140。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅵ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第19巻, 2013, pp.259-269。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子・植田敦三ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅶ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第20巻, 2014, pp.161-181。

小原友行・深澤清治・朝倉淳・松浦武人・松宮奈賀子ほか「大学院生によるアメリカの小中学校での体験型海外教育実地研究Ⅷ」, 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター編『学校教育実践学研究』第21巻, 2015, pp.143-161。